

The number of prehospital defibrillation shocks and 1-month survival in patients with out-of-hospital cardiac arrest

長谷川, 学

<https://hdl.handle.net/2324/1959194>

出版情報 : 九州大学, 2018, 博士 (医学), 論文博士

バージョン :

権利関係 : © 2015 Hasegawa et al.; licensee BioMed Central. This is an Open Access article distributed under the terms of the Creative Commons Attribution License

氏 名：長谷川 学

論 文 名：The number of prehospital defibrillation shocks and 1-month survival in patients
with out-of-hospital cardiac arrest
(院外心停止患者における院外除細動回数と1か月後生存)

区 分：乙

論 文 内 容 の 要 旨

救急救命士によって行われる二次救命処置のうち、除細動は院外心停止患者に対して行われる重要な処置であるが、これまで院外心停止患者に対する除細動可能な病院到着前除細動の回数と、1ヶ月後生存との関連は明らかではなかった。本研究では、総務省消防庁が提供する2009年1月1日から2012年12月31日までの間の院外心停止患者から得られたレジストリデータ（救急蘇生統計）のうち、除外基準にかかる症例を除いた20,851例を用いて、院外心停止患者に対する院外除細動の回数と1ヶ月後生存との関係を調べた。

信号検出分析法を用いて分析したところ、院外心停止患者の生存に最も強く関連している病院到着前除細動回数のカットオフ・ポイントは、2回以下と3回以上の間であった。2回以下の除細動を受けた患者の1か月後生存は34.48%であり、3回以上の除細動を受けた患者の1か月後生存は24.75%であった。3回以上の除細動が必要な場合は1ヶ月後死亡の確率が上昇した。生命予後に強く関連する病院到着時間で解析しても、除細動回数のカットオフ・ポイントを2回以下と3回以上の間置くことの妥当性が示された。

本研究知見は、院外心停止患者の蘇生において、救急救命士が、医師の包括指示下のもと、オンラインによる個別具体的な指示を受けることなく、2回までの除細動を実施することを支持する。

